

乳児期水痘罹患例にみられた 小児帯状疱疹の検討

にし の やす お
西 野 泰 生

キーワード：乳児期軽症水痘罹患，早期帯状疱疹発症，
水痘帯状疱疹 IgG 抗体

要 旨

最近経験した帯状疱疹12例のうち乳児期水痘罹患 5 例の病態を検討した。

乳児期水痘罹患月齢は生後 5 か月 2 例，7 か月，10 か月，12 か月各 1 例であり，平均月齢は7.8か月であった。帯状疱疹の発症年齢は1歳1か月から8歳，平均3.4歳であったが，5例中4例は3歳までに発症している。これに対し1歳以上群の水痘罹患年齢は2.7歳であり，帯状疱疹は4歳～14歳，平均年齢9歳であった。すなわち1歳未満の水痘罹患例の帯状疱疹は1歳以上群に比し，より早期に帯状疱疹の発症がみられた。また水痘症状は軽症，あるいはきわめて軽症例が多く，乳児期水痘の重症度も重要なリスク要因と思われた。

診断は多くは臨床像のみで可能であったが，非定型例では抗体の検索を必要とした。今回は酵素抗体法（EIA）により IgG 抗体を検索したが，有用な結果が得られている。

はじめに

水痘は幼児期に好発するウイルス性伝染性疾患であるが，罹患後獲得された水痘帯状疱疹ウイルス（VZV）抗体は加齢とともに減弱し，一部に帯状疱疹を発症するものがみられる。このうち小児の帯状疱疹は比較的稀であり，特に3歳以下の症例は少ないとされているが，その要因として乳児期水痘罹患がリスク要因として重視されてい

る。今回は乳児期水痘罹患例で後日帯状疱疹を発症した症例について，水痘罹患年齢と帯状疱疹の関連を中心に検討した。

I. 対 象

1997年から2007年に経験した帯状疱疹12例のうち，乳児期に水痘罹患した5症例を対象とした（表1）。帯状疱疹の診断は臨床症状，水痘帯状疱疹ウイルス（VZV）IgG抗体（EIA）の検索によったが，抗体検査はSRLに依頼（IgG抗体陽性値は2.0以上），また対照とした健康小児（16例）平均IgG値は 17.06 ± 9.90 であった。

Yasuo NISHINO

西野小児科アレルギー科医院

連絡先：〒690-0056 松江市雑賀町433